

ウッドトランスフォームシステムコンペティション

審査委員インタビュー記事

■小林博人先生インタビュー

訪問日：7月11日(水) 訪問場所：渋谷区 事務所

1) 小林博人先生キャリア紹介 FB 更新日：8月3日

【小林博人先生 キャリア紹介】



京都大学、ハーバード大学大学院デザインスクールで建築設計・都市デザインを学んだのち、日本やドイツ、アメリカで設計業務に従事しました。その後はハーバード大学大学院で博士号を取得し、日本における東京ミッドタウンプロジェクトのマネジメントをはじめ、国内外で多くのプロジェクトに携わっています。都市の変わり様を的確に捉え次の都市の在り様を構想し、ヴィジュアルライズすることを目的に活動しています。本コンペ開催にあたって以下のコメントを寄せてくれました。

「建築はプロだけが設計し建設するものではなく、いろいろな人が作るプロセスに参加することに意味があります。このコンテストではその意味で多くの方々に作るプロセスに参加していただき、建築を身近に感じてもらいたいと考えています。」

2) 小林博人先生ベニアハウス紹介 1 FB 更新日：8月8日

【小林博人先生 ベニアハウスプロジェクト紹介】

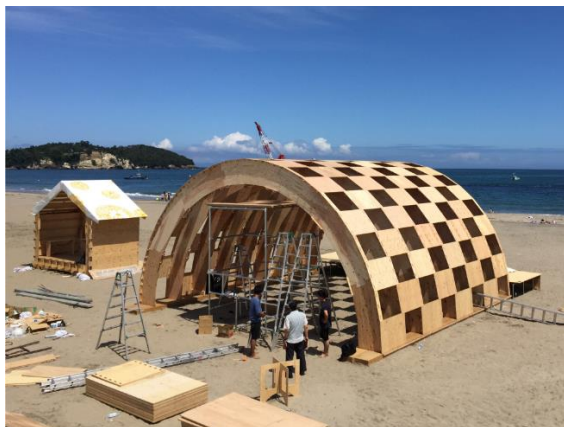
ベニアハウスとはベニア合板を使う建物のことで、人の手で安価で早く簡単に建てることができます。災害後の人手や材料・道具が不足する状況下で、建築設計・施工で復興に貢献するために生み出されました。2012年に第1号が宮城県南三陸町に建てられたのち、ミャンマーの集落住民とともに建てた学習施設などを経て、できるだけ簡単に建てられるものを目指し改良が続けられています。



3) 小林博人先生ベニアハウス紹介 2 FB 更新日：8 月 10 日

【小林博人先生 ベニアハウスプロジェクト紹介②】

ベニアハウスには、災害復興以外にも様々な用途があります。その 1 つが「釘のない海の家」で、アーチ状の屋根と天幕で 3 つの小屋を覆う構造となっており、釘を 1 本も使わないことと、シーズンごとに解体・施工を繰り返すことができるのが特徴です。ほかに、このベニアハウスでオフィス内に目隠しをつくりつつ完全には仕切らないような打合せスペースも作られています。



4) 小林博人先生ベニアハウス紹介 3 FB 更新日：8 月 17 日

【小林博人先生 ベニアハウスプロジェクト紹介③】

小林先生のベニアハウスの事例は実際の災害対応において世界中で実現され高く評価されています。それは現地の資材と道具を使い、現地の方々が主体となってベニアハウスを作り被災者を支援しているからです。また、オフィス打合せスペースの事例の通り、無機質なオフィスに木材を利用した温かみのある空間をベニアを利用して簡単に構築しています。これらの事例が示す、ローカライズができること、簡便でかつ豊かな空間が構築できることが木材の大きな優位性なのではないかと思います。小林先生の事例にあるような被災者支援ができる構造物を、特別な備蓄スペースを必要とせず日常利用できる木質製品として全国に設置していくことがウッドトランスフォームシステムの目的になります。皆様からの様々なトランスフォームのアイデアをお待ちしております。



■渡會清治先生インタビュー

訪問日：8月9日(水) 訪問場所：千代田区 日本都市計画家協会

5) 渡會清治先生キャリア紹介 FB 更新日：8月28日

【渡會清治先生 キャリア紹介】

インタビュー記事第2弾をお届けします。今回は委員長の長谷川が渡會清治先生にお話を伺ってきました。

渡會先生は都市計画を専門として40余年民間の都市プランナーとして活動をされています。1970年代に当時東京大学助教授だった伊藤滋先生のもとで都市防災に係るようになり、東京都内の木造密集市街地等における都市防災不燃化事業の調査計画を契機に安全なまちづくりに携わるようになりました。東日本大震災時にはNPO 日本都市計画家協会の副会長として復興支援活動の先頭に立ち、多くの関係機関と連携しつつ復興に向けた政策提言や支援活動に携わるとともに、釜石、陸前高田、大船渡などの被災地区での復興まちづくりを地元の方々と共に継続して行っています。被災地防災活動や復興支援においては人と人との繋がりを重視し、例えば住民と行政の連携・協働の枠組み作りや、被災者の方々が主体となって復興まちづくりができるよう、活動されています。



6) 渡會清治先生コメント紹介1 FB 更新日：8月31日

【渡會清治先生 コメント紹介】

長谷川：渡會先生は都市計画家として、どんな仕事に関わってきたのでしょうか。

渡會先生：ベースは都市や地域の「マスタープラン・総合計画」と呼ばれるものを行政の方々と一緒に検討する業務ですね。その対象となるものによって、都市全体のマスタープランであったり中心市街地、ニュータウン、住宅地、住工混在地と様々で、その一つに密集市街地などの防災上課題を抱える地区もあります。安心安全なまちづくりに携わる中で、木造密集市街地の整備に関する調査計画といった防災の仕事も扱ってきたため、普段使う木材を防災も活かすこのコンペに意義深さを感じました。

長谷川：災害復興・災害対策においてどのようなことが重要だと考えられていますか。

渡會先生：まずは事前の準備ですね。特に東日本大震災以降重視されるようになったのが、事前復興とか復興事前準備という名前と呼ばれる、災害事前準備です。これは、あらかじめ大震災や水害などの大きな災害が来ることを想定し、各市町村や地区レベルで被災時から復興までの具体的な対応・行動のシミュレーションを行っておくものです。被災都市の現状に即して被災・避難・復旧・生活再建・復興に必要な手立てを時間軸に沿って検討し、いざ被災が現実になったときに即座に対応ができるように準備をしておくものです。災害対策はスピードが極めて重要なので、事後に復興計画をつくることはそれだけ時間ロスを生むものであり、こうした事前に、復興に向けた計画づくりを行うことはとても重要だと思います。

そして、被災者の生活再建に向けた迅速なプロジェクトマネジメント（PM）も重要だと思います。災害の規模によってこのPMはかなり変わりますが、避難所～仮設住宅～本設住宅（or 元の住まい）という一連の流れを如何に被災者に寄り添って組み立てられるかですね。

7) 渡會清治先生コメント紹介2 FB 更新日：9月4日

【渡會清治先生 コメント紹介②】

長谷川：避難所生活への支援で特に足りていないのはどんなことですか？

渡會先生：現状の避難所生活は、台風などの危険から1～2日程度避難する程度のレベルしか考えていないのではないのでしょうか。1週間以上そこに留まることはもともと想定外であって、それが戦後ずっと続いてきてしまったのではないか。この間、我が国の日常生活の水準が飛躍的に向上したのに、避難所生活は相変わらず「非常時だから仕方がない」「一時的なものだから我慢すべきもの」との考えが強かったのではないか。その結果として被災者のQOL（＝生活の質）が軽んじられ、個人のプライバシーはないに等しいような環境を強いられてきたのであって、もうそれは脱却すべきものだと思います。

長谷川：災害時のストレスを軽減するには、どんな方法があるでしょうか。

渡會先生：ストレスの最大の要因は、この先どうなるのだろうかという不安です。これにはできるだけ迅速に、この後の復旧・復興の見通しや生活再建に向けた見通しを被災者に伝えることが重要で、このためにも先ほどの災害事前準備をつくっておくことが大事になります。もう一つは、平時・日常との生活状態の落差や劣悪なQOLの状況が大きな要因だと思います。今の多くの避難所は体育館などもともと一時的にせよそこに住まうということを全く想定していない、無機質な空間であり、被災者のストレスは大きいと思います。例えば、そこに畳や木材などをうまく使って落ち着ける場をつくるなどのちょっとした工夫などはストレス軽減に貢献できるかと思います。また、世界的にも木材の課長、木質化の潮流があり、成功すれば良い手本にもなりそうです。

8) 渡會清治先生コメント紹介 3 FB 更新日：9 月 7 日

【渡會清治先生 コメント紹介③】

長谷川：防災設備として WTS はどんな場所で役立ちそうですか？

渡會先生：まずは一時避難場所となる公民館や学校に導入するとよさそうですね。

長谷川：そのような一時避難場所では、どんな問題が起きていますか？

渡會先生：例えば学校の体育館は現状では床に雑魚寝がほとんどです。個人のプライバシーもなく、人の出入りによって土やほこりを吸い込みやすく、肺炎等のリスクを増加させる問題が生じていますね。

長谷川：簡易ベッドなどを大量に搬入する必要があるそうですが、被災直後は交通網が分断されることも多く時間がかかりそうです。

渡會先生：事前に公共サービス施設に WTS のような仕組みを導入することで、被災直後にスムーズな対応ができるようになると思います。また普段使われているものを変形し利用するのであれば、備蓄スペースが不要になるのも利点ですね。

9) 渡會清治先生コメント紹介 4 FB 更新日：9 月 10 日

【渡會清治先生 コメント紹介④】

長谷川：防災のことを考えるにあたって、なにかアドバイスをいただけますか？

渡會先生：自分たちが住んでいる地域で災害が起きた場合を想像してみるといいでしょう。危険を認識し手を打つことは重要ですが、ネガティブにならず「こうしたら避難所生活も楽しめそうかな」といった具合にポジティブに考えてみてください。

長谷川：このコンペで面白さを感じることも、何かメッセージをお願いいたします。

渡會先生：普段使っているものを防災にも活かすことができるのは、木材ならではの利点だと思います。WTS の実現・導入後は、災害復興後のリユース等、発展的な利用可能性があるかもしれません。またアイディアコンペではありますが、単純にアイディアを出すだけでなく実現できる可能性があるところが面白いですね。簡単な設備であっても災害直後は助けになるので、独創的なアイディアに期待しています。

10) 渡會清治先生インタビュー 総括 9 月 15 日

【渡會清治先生 インタビューまとめ】

被災直後の、特にインフラ復旧など支援が始まるまでの段階において、すぐに変形して使うことのできる WTS は被災者支援に大きく貢献できるようです。ちょっとしたベッドやプライバシーに配慮した間仕切りなど、簡単なものであっても被災者の QOL 向上の役に立ちます。地震や水害といった災害の多い日本で防災を考えるのは大事なことです。できるだけ前向きに楽しみながらアイディアを練っていただけたらと思います。

■伊藤滋先生インタビュー

訪問日：8月30日(木) 訪問場所：渋谷区 伊藤滋都市計画事務所

11) 伊藤滋先生キャリア紹介 FB 更新日：9月26日

今回、長谷川が伊藤滋都市計画事務所を訪ね、審査委員長の伊藤先生からお話を伺ってきました。

【伊藤滋先生 プロフィール】

昭和6年（1931年）8月20日東京生まれ

東京大学名誉教授（Professor Emeritus）

一般財団法人 国土計画協会 理事長

一般財団法人 都市防災研究所 会長

専門分野：都市防災論 国土及び都市計画

<学歴> 昭和 30年 3月 東京大学農学部林学科卒業
32年 3月 東京大学工学部建築学科卒業
37年 3月 東京大学大学院工学系研究科博士課程建築学専攻修了
工学博士

<略歴> 昭和 38年～40年 MIT・ハーバード大学共同都市研究所 客員研究員
40年 11月 東京大学工学部都市工学科 助教授
56年 7月 東京大学工学部都市工学科 教授
平成 4年 4月 慶應義塾大学環境情報学部 教授
4年 5月 東京大学名誉教授
6年 4月 慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科 教授
14年 4月 早稲田大学 特命教授

<社会活動> (元) 国土交通省 都市計画中央審議会 会長
(元) 財務相 国有財産の活用に関する有識者会議 座長
(元) 日本相撲協会 理事
(元) 内閣官房 都市再生戦略チーム 座長

主な設計計画 千里ニュータウン中央地区センター設計 昭和 38年
山形市都市基本計画（三浦記念賞受賞） 昭和 42年
浦安地区住宅地基本設計 昭和 53年

主な著書 「提言・都市創造」 平成8年（晶文社）
「市民参加の都市計画」 平成9年（早稲田大学出版会）

「東京のグランドデザイン」
「昭和のまちの物語」
「東京、きのう今日あした」
「たたかう東京」
「旅する街づくり」

平成 12 年（慶應大学出版会）
平成 18 年（ぎょうせい）
平成 20 年（NTT 出版）
平成 26 年（鹿島出版会）
平成 30 年 1 月（万来舎）



12) 伊藤滋先生コメント紹介 FB 更新日：10 月 4 日

【伊藤滋先生を訪問しました ①分野を超えた学びの大切さ】

伊藤先生は農学部で林学を学んだ後、恩師の助言で工学部に入り建築学を勉強したことが、都市工学の仕事に大いに役立っているそうです。以来ずっと分野を超えた学びを重視しており、例えばドイツでの戦災復興の都市計画から日本にはない発想を学ぶなど、常に異なるところへ関心を持っているそうです。このコンペでも、分野や世代を超えた色々な人のアイデアが集まることで、今までにないものが生まれるという大きな意義があります。そうして集まった提案が、未来のまちづくりに活かされ、新しい日本の安全な都市に貢献します。ぜひ、多くの素晴らしいアイデアをお待ちしています。

13) 伊藤滋先生コメント紹介 2 FB 更新日：10 月 6 日

【伊藤滋先生を訪問しました ②WTS の画期性】

伊藤先生は以前ドイツへ行った際、鉄道の駅ホームに線が引いてあるのを見かけたそうです。何かと思ったら、これは駅が避難所としてあらかじめ指定され、地面に線を引いて区割りをを行い「重病者はこちらへ」などと決めておくことで災害対応をスムーズにするものだったようです。同様のものが教会の地下にもあり、こうした事前のシステムづくりの上手さに大変驚いたと言います。一方で日本人には、それにも増して素晴らしい転用の文化があります。柔軟で臨機応変な気質で、親しみ使い古した物を転用した大事に使う文化です。そのような日本人の持つ文化を活かし、かつドイツ的なシステム作りの上手さを取り入れた画期的なコンペであり、大変素晴らしいと評価していただきました。

14) 伊藤滋先生コメント紹介 3 FB 更新日：10 月 9 日

【伊藤滋先生を訪問しました ③人と木の深い関わり】

国土の 7 割が山林であり都市と密接な繋がりのある日本で、都市計画する上で森は無視できません。山林を管理する上で、切り捨て間伐という丸太をそのまま山に放置する間伐方法があります。搬出コストに見合わず赤字になるため、やむを得ずこの方法がとられることがあるのですが、この丸太は豪雨などの災害時に土砂とともに流れていき、街の被害を大きくする要因となります。山の斜面を段々に造成することで水の流れが遅くなり、土砂崩れが起きにくくする方法もありますが、1 番の解決策は木材需要を高めることです。伊藤先生は木材の質感や風合いが好きで、自宅にウッドデッキを施工してもらったこともあるそうです。15 年ほど前の施工ですが、今もきれいで素晴らしいと言います。見た目の美しさはもちろんですが、素材として多くの利点があることに触れられました。再生産・持続可能な資源であることや、切ったり継いだりという加工が容易であること、可変性などといった点です。日本人は昔から、木の特性を見極め徹底的に使ってきたこともあり、文化的に木と深く関わってきました。このコンペを通じて、人と木の関わりがますます深まり、ビルやマンションといった都市景観に木が増えることを願っています。

■古久保様英嗣先生インタビュー

訪問日：10 月 16 日(火) 訪問場所：江東区 日本住宅・木材技術センター

15) 古久保様英嗣先生キャリア紹介 FB 更新日：10 月 31 日

【古久保英嗣先生 プロフィール】

日本住宅・木材技術センターは、木造住宅などにおける木材の利用技術を開発・普及し、関連産業を活性化することを目的として、昭和 52 年に設立された公益財団法人です。実物大住宅等における耐火・耐震実験、木造住宅の構造計算方法の確立、木質部材の開発など、その時々的情勢に応じた事業を通じて、木造建築の普及に貢献しています。古久保様は、平成 28 年より日本住宅・木材技術センターの理事長を務めております。古久保様は、食糧問題に取り組むことを志し東京大学農学部へと進みました。その後、縁があって林産学を学ぶようになり、時期を同じくして林野庁が林産学を学んだ学生をリクルートし始めたことから、林野庁へ入庁しました。古久保様の略歴は、下記のとおりです。

日本住宅・木材技術センター <https://www.howtec.or.jp/>

昭和 31 年 11 月 6 日生まれ

公益財団法人 日本住宅・木材技術センター 理事長

学歴

昭和 55 年	3 月	東京大学 農学部 林産学科卒業
昭和 61 年	1 月	カリフォルニア大学バークレー校 天然資源科学部 野生地資源科学修士課程修了

職歴

昭和 55 年	4 月	林野庁 入庁
平成 9 年	10 月	北海道庁 水産林務部森林計画課長
平成 18 年	1 月	林野庁 整備課長
平成 23 年	8 月	林野庁 森林整備部長
平成 25 年	7 月	北海道森林管理局長
平成 28 年	3 月	農林水産省を退職

団体歴

平成 28 年	6 月	公益財団法人 日本住宅・木材技術センター 理事長（～現在）
	7 月	一般社団法人 木材表示推進協議会 理事・副会長（～現在）
	8 月	一般財団法人 日本建築センター 評議員（～現在）
平成 29 年	5 月	公益財団法人 日本木材加工技術協会 理事（～現在） 一般財団法人 林業経済研究所 理事（～現在）
	6 月	一般財団法人 ベターリビング 理事（～現在） 一般財団法人 住宅保証支援機構 理事（～現在） 公益財団法人 住宅リフォーム・紛争処理支援センター 評議員（～現在）

16) 古久保英嗣先生コメント紹介 FB 更新日：11 月 2 日

【古久保英嗣先生コメント① 森林整備・林業】



林野庁では、山形県や秋田県などで森林整備のための助成施策をつくり、その実行に携わってきました。自治体の森林組合などと協力し、効率的な整備ができるような取り組みに挑戦してきました。日本の気候は、植物の生育に恵まれた気候であり、そのため多様で豊かな植生が全土にわたって分布しています。ただしこの豊かさは林業にとっては困難な点となります。植林した森林をしっかり整備

していかなければ、すぐに目的以外の木や草に覆われてしまい、良材を育てることができなくなってしまいます。北米や欧州と比べて、気候に恵まれた日本の森林整備事業ならではの苦労もあるのです。森林整備事業には困難もありましたが、近年、それらの国産材利用が注目され、利用拡大への追い風が吹いていることに喜びを感じています。

林業の従事者は、長年緩やかに減少傾向にあります。若手雇用の支援「緑の雇用」が功を奏し、若者の雇用が進んでいる側面もあります。また最近では、林業用の重機が進化をして伐採作業の負担と危険性が大幅軽減されています。生産性も飛躍的にあがっています。林業、木材業の将来にたいへん期待をもっています。

17) 古久保英嗣先生コメント紹介 2 FB 更新日：11 月 10 日

【古久保英嗣先生コメント② 森林と災害について】

約 2,500 万 ha ある日本全国の森林のうち、約 1,000 万 ha がスギやヒノキ、カラマツといった人工林です。森林林業基本計画において、今ある人工林の 7 割程度はこのまま植林を続け人工林として残し、残りの 3 割は混交林などになっていく見通しです。しかし、現在は植林の担い手が少ない状況となっています。ドイツでは、若い木と成熟した木が並んでいて、成熟した木から自然に種が落ち育つようになっています。こうすることで、人の手間を軽減しつつ上手に植林を行うことができるのですが、山々の険しい日本ではそうはいかず、どうしても人の手がかかります。

森林整備は防災上も重要です。今年の西日本豪雨のようなレベルでは限度を超えていますが、きちんと森林整備の行き届いた山林は、大雨が降った際の土砂流出を防ぎ、表層崩壊を食い止めてくれます。俗に、「緑のダム」と呼ばれるものです。たくさん植えたスギやヒノキが土砂災害を悪化させているとの誤解も一部にありますが、それは誤りで、上にも書いたように適切な植林・森林整備は災害防止の効果があります。森林を健全な状態で維持管理することができれば大変良いことです。



18) 古久保英嗣先生コメント紹介 3 FB 更新日：11 月 20 日

【古久保英嗣先生コメント③ 木育と木材の利用可能性について】

林野庁での仕事をしてきた中で、木材利用はあくまでも次の世代に繋げる森林維持管理のための副次的なものと考えていたそうです。しかし現在では、木材利用そのものが温暖化防止など地球環境のために役立つことが分かっているため、鉄やコンクリートなど既存の資材を、もちろん向き不向きはありますが、置き換えられるところは木材に置き換えていくべきだと考えています。そのための新しい建築や、木育の取り組みといった

ものに大きな期待感を持っています。例えば、北海道の置戸町などでは学校給食の食器として地元の木工所で作った木製のお椀が使われています。木に対するこだわりを持つのは日本人だけではありません。スイス人やドイツ人は素敵な木のおもちゃを作ります。イタリア人は、素晴らしい木製家具を作るのに世界中から良い木を集めます。新しい学校や福祉施設が木造で建設されたニュースも、よく耳にするようになりました。面白いところでは、世界最古の木製椅子はピラミッドで見つかったクフ王の母が使っていた椅子で、アフリカ産の木材を使っていたそうです。

19) 古久保英嗣先生コメント紹介 4 FB 更新日：11 月 22 日

【古久保英嗣先生コメント④ WTSC への期待】

東日本大震災の時、東北森林管理局には薪ストーブが多くあり、それが被災地で活躍しました。木っ端はどこにでもあり、燃やすことで暖をとれる。そうした状況で、何もな
いときには木材がいろんな形で役に立つものだと感じました。このような経験もあり、
災害に着目したのは良い着眼点だと思います。このコンペに応募するに当たって期待す
ることは、実際に役に立つかどうか以上に、いろんなアイディアを考えてくれることだ
と考えています。普段あまり考える機会のない災害のこと避難所生活のことを考えてア
イディアをだしてもらいたいと思います。WTS が実際に導入され使われるとすれば、
都市の事業所や事務所ではないかと思うので、そういった場所を想定してみるとイメー
ジしやすいのではないのでしょうか。いろいろなアイディアを考え、応募していただける
ことを期待しています。

■石川永子先生インタビュー

来訪日：8 月 10 日(金) 来訪場所：江東区 長谷萬ビル

20) 石川永子先生コメント紹介 FB 更新日：12 月 5 日

【石川永子先生 コメント紹介】

長谷川：避難所生活への支援で特に重視すべきことはなんでしょうか？

石川先生：QOL（＝生活の質）を向上させることが非常に重要です。被災直後 3、4 日
は被災者が殺到しその余裕はありませんが、電気等が少し復旧した後は、この QOL を
高める必要に迫られます。なお、これは快適に生活できるようにするという意味ではな
く、普段の生活に少しでも近づけることを意味します。

長谷川：QOL が低いと、どんな問題が起きるのでしょうか？

石川先生：生活不活発病のリスク増大が懸念されます。生活不活発病とは、例えば高齢
の方が床に座り続けると立ち上がることが苦しくなり、次第に動けなくなってしまうこ
とをいいます。また、災害関連死の恐れもあります。これは、避難所生活で具合を悪く
し死に至ることをいいます。

長谷川：避難所では、そのような病状や死因が多いのでしょうか。

石川先生：日本では特に多いですね。「1 人あたりのスペースは最低 3.5 m²確保すること」などといった項目をまとめた「スフィア基準」という避難所の国際基準がありますが、日本の避難所のほとんどがこれを満たしていません。残念なことに、日本は先進国でありながら災害関連死が増加傾向にあります。

21) 石川永子先生コメント紹介 2 FB 更新日：12 月 6 日

【石川永子先生 コメント紹介②】

長谷川：自宅で生活が困難になった避難民は、まずどこへ集まるのでしょうか。

石川先生：避難所となる場所の例としては、公民館や自治会館、学校のほか、マンションがあります。東京都内のマンションは基本的に在宅避難となっていて、最近売り出されているマンションは防災設備をアピールすること多いくらいです。

長谷川：避難民には健常者以外の方もいると思いますが、どのような対応があるのでしょうか。

石川先生：避難所には一般避難所と福祉避難所というものがあります。福祉避難所とは、一般避難所では受け入れの難しい方のための避難所ですが、キャパシティが少ないという問題があります。対応策としては、一般避難所の一部区画を福祉スペースとしたり、あるいは一般避難所自体の生活水準を底上げすることが考えられます。

長谷川：避難民の殺到する避難所は、スペース確保が難しそうですね。

石川先生：被災直後、詰めかけた避難民が混乱の中で自分のスペースを勝手に作ってしまうので、数日後に区画整理を行います。不公平感を生まないようにスペース配分をし、通行のための通路をつくる意味合いもあります。この時はほとんどの人が土足なので、掃除をするとともに土足禁止にします。

22) 石川永子先生コメント紹介 3 FB 更新日：12 月 7 日

【石川永子先生 コメント紹介③】

長谷川：避難生活はどれくらいの期間続くものなのでしょうか？

石川先生：海外における災害対応の事例が参考になることもあります。例えば 2012 年ニューヨークのハリケーン被害の際は、インフラ復旧を急ぎ、市民に自宅に早めに帰っていただき、本来の生活に戻る支援をしました。被災者は自宅から離れたがらない傾向にあるため、時としてこうした対応も考えられます。

長谷川：防災を考える上で、重要な指標のようなものがあれば教えてください。

石川先生：災害対策で大事なことのひとつは、避難所の多様性を尊重し、質を高めることです。例えば、子どもたちのプレイルームのような空間をつくったり、ベッド、トイレといった設備の質が向上すると多くの被災者の助けになることと思います。

23) 石川永子先生インタビュー総括 FB 更新日：12 月 8 日

【石川永子先生 インタビューまとめ】

避難所の実情や海外と日本の違いなど、災害支援について具体的なお話を伺うことができました。やはり現行のやり方では被災直後の対応が難しいということから、あらかじめ防災設備を組み込んでおく必要性を感じました。大事なことは、避難生活中もできるだけ普段の生活に近い生活ができるようにすることで、そのためには例えば腰を掛けられる場所があるだけでも助けになるようです。長期間過ごすこともあるため、特に子育てスペースのような共用スペースには暖かみのある木材を使うことで、被災者の助けになるかも知れません。

■大木聖子先生インタビュー

訪問日：11 月 14 日(水) 訪問場所：港区 品川プリンスホテル

24) 大木聖子先生 キャリア紹介 FB 更新日：12 月 20 日

【大木聖子先生 プロフィール】

大木聖子先生は、北海道大学理学部地球惑星科学科を卒業後、東京大学大学院理学系研究科にて博士号を取得。カリフォルニア大学サンディエゴ校スクリプス海洋学研究所にて日本学術振興会海外特別研究員を務めました。その後は東京大学地震研究所助教授を経て、2013 年 4 月より慶應義塾大学環境情報大学准教授を務めておられます。現職に至るきっかけは、高校 1 年生のころに経験した阪神淡路大震災です。当時東京にいた大木先生は、被災地で困窮する同世代の子たちの姿を画面越しに観ていました。大きなショックを受け、人を救いたいと強く思うようになったそうです。中学生の時に読んだ「教室ではおしえない地球の話」という地震学の本が印象に残っていたこともあり、著者である島村英紀先生が教授を務める北海道大学へ進むことを決めました。その後は、地震学を研究し、次第に防災教育に力を入れるようになりました。

25) 大木聖子先生 コメント紹介 FB 更新日：12 月 21 日

【大木聖子先生 コメント① 人間と向き合いコミュニケーションすること】

「赤信号は”止まれ”」は誰でも知っているのに交通事故が起こることを例にとり、単に知ってもらうだけでは防げない、救えないことがあると大木先生は言います。以前はとにかく知識をつけてもらうことで救おうと考えたこともあるそうですが、本質的にそうではない、もっと踏み込む必要があると考えるようになったそうです。極端に言えば、地震を知らなくとも逃げさえすれば救われると。そこで、もっと人間に向かいコミュニケーションすることを重視するようになりました。長野県の小学校の生徒を対象に、100 世帯を 2 年間追跡調査した例があります。そこで分かったのは、防災行動を起こさない人は実際に効果があるのかを懸念したり、やり方が分からない、時間が無いという人が多いこと。逆に行動を起こす人は、例えば子どもが自宅だけでなく祖父母の家の災害対

策を心配する姿を見て、親が「期待に応えてあげたい」「思いやりのある子だ」と感じる
ことが原動力になります。「将来災害が起きた時の被害を抑えることよりも、今発生す
る利益」を意識する方が、人々が防災行動を起こしてくれる。目的志向になりすぎない
ほうが、無理なく自然に継続できることが分かってきています。

26) 大木聖子先生 コメント紹介 2 FB 更新日：12 月 22 日

【大木聖子先生 コメント② 災害の性質の違い・避難所での高齢者対応】

東日本大震災のような津波を伴う地震では、50cm の高さの津波であっても巻き込まれ
ると死に至ります。助かるのは走って逃げることでできる健康な方々で、生存するか亡
くなるかの両極端な結果になります。そのため、当時現地へ向かった災害医療従事者に
話を伺うと、「医者としてできることは無かった」と言います。一方で阪神淡路大震災
のような津波を伴わない地震では、両極端にはならずグラデーションになっていて、被
災後 72 時間が勝負といった状態です。災害の性質によりもたらす影響も異なるため、
それに応じて取るべき対応も変わってきます。

災害発生直後を切り抜け助かったとしても、普段の生活の場と違う避難所では別の問題
が起きます。高齢者のように日常的に何かを支えにして生活する方々が、その支えを
失うことで倒れていくのです。つまり、高齢化問題の早回しだと言えます。そのため、
避難所運営に当たっては高齢の方や体の不自由な方がいることも踏まえた対応を考え
ることが大事です。例えば現代の高齢者の多くがベッドで寝ることを考えれば、避難所
にも雑魚寝に毛布ではなく簡易ベッドの用意を考えるべきです。そうした少しの工夫が、
被災者の大きな助けになります。

27) 大木聖子先生 コメント紹介 3 FB 更新日：12 月 23 日

【大木聖子先生 コメント③ 避難所に必要なもの】

避難所で生活する被災者にヒアリングを行うと見えてくるものもあります。例えばプ
ライバシーを守るための間仕切りですが、「お隣が見えないと不安だから取り払ってほし
い」と言う人もいました。よくよく観察してみると、その被災者の方が本当に必要とし
ていたのはお茶会のできるテーブルでした。簡単なもので構わないので被災者同士のコ
ミュニケーションを促進する、そういう工夫が必要なのだと思います。また、被災者は
心に傷を負い、外遊びすらできなくなっている状況です。それを考えると、遊び心を刺
激する、ワクワクするような何かを用意し、憩いの場を提供することも必要になってく
るでしょう。高知県にはこんな例もあります。山を所有する方たちが、自分たちの力で
避難施設を造りました。ただの避難施設ではなく、花見に来て楽しい時間を過ごせるよ
うな、かなり遊び心のある場です。そうした工夫があることで、防災意識・避難のモチ
ベーション向上に寄与できると思います。今までにない防災設備として、ぜひそのよ
うな工夫のアイデアを盛り込んでみてほしいと思います。